

世界の発達障害研究者として見た「資料作成」の基本方針：科学的根拠と社会的理解の架け橋

はじめに：現代社会における誤解の根強さ

我々は、神経科学が前例のない速度で進歩し、多様性(ダイバーシティ)の尊重が社会の主要な議題となっている時代に生きています。しかし、この現代においてなお、発達障害をめぐる古く、科学的根拠のない誤解が根強く残っているという、重大なパラドックスに直面しています。なぜ「怠けている」「わがまま」「親の育て方が悪い」といった言葉が、公の場でも個人の会話の中でも、いまだに聞かれるのでしょうか¹。科学的エビデンスが明確に異なる方向を指し示しているにもかかわらず、なぜこのような状況が続くのでしょうか。

本報告書の使命は、これらの神話を体系的に、そして決定的に解体することにあります。そのために、三つの重要な要素を織り交ぜた、包括的でエビデンスに基づいた物語を構築します。第一に、神経生物学に関する最新の科学的知見。第二に、これらの状態がどのように認識されてきたかという、複雑でしばしば痛みを伴う歴史。そして第三に、神経発達の特性を持つ当事者(ニューロダイバージェント)とその家族が実際に生きてきた経験です。

この文書は、教育者、保護者、政策立案者、雇用主、そしてこのテーマに知的な誠実さと人間的な思いやりをもって向き合おうとするすべての人々にとって、基礎となる資料となることを目指しています。感情論ではなく、検証された事実と深い洞察に基づき、発達障害に関する対話を、非難から理解へ、そして排除から包摂(インクルージョン)へと転換させるための羅針盤となることを願ってやみません。

第1章：スペクトラムの定義 — 現代科学の土台

本章では、発達障害が神経生物学的な起源を持つという、揺るぎない科学的基盤を確立します。過去の「非難に基づく」モデルを体系的に解体し、現在のエビデンスに基づいたコンセンサ

スを明らかにします。

1.1 神経発達パラダイム:それは脳から始まる

発達障害(自閉スペクトラム症(ASD)、注意欠如・多動症(ADHD)、限局性学習症(SLD)など)は、脳の特有な発達経路と機能的構造に根差した、生まれつきの状態です³。この核心的な原則は、社会に根強く残る「親のしつけが悪い」「本人の努力が足りない」「甘えである」といった偏見を科学的に否定する上で、極めて重要です²。これらの特性は、個人の性格や道徳性の欠如ではなく、神経学的な差異の現れなのです。

これらの神経学的な違いは、社会的コミュニケーション、感覚処理、実行機能、学習スタイルなど、観察可能な特性として表出します⁶。例えば、比喩表現や冗談の理解が難しかったり⁷、決まった手順や予測可能な環境を好んだりするのは、意志の弱さや頑固さではなく、異なる認知アーキテクチャの直接的な結果なのです。感覚の過敏さや鈍麻も同様で、特定の音や光、触覚に対して強い不快感や逆に鈍感さを示すことがあります。これもまた、感覚情報を処理する脳の仕組みの違いに起因します⁶。

1.2 世界の診断基準:DSM-5とICD-11

現在、発達障害の診断は、主に二つの国際的な診断マニュアルに基づいて行われています。一つは米国精神医学会(APA)が発行する『精神疾患の診断・統計マニュアル 第5版』(DSM-5)、もう一つは世界保健機関(WHO)が採択した『国際疾病分類 第11回改訂版』(ICD-11)です⁹。これらのマニュアルは、科学的知見の蓄積を反映して改訂を重ねており、その変遷は我々の理解の深化を物語っています。

特筆すべきは、DSM-5(2013年発行)とそれに続くICD-11(2019年採択)における、自閉症に関する診断概念の大きな転換です⁹。それ以前のDSM-IVやICD-10では、「自閉性障害」「アスペルガー障害」「特定不能の広汎性発達障害(PDD-NOS)」といった個別の診断カテゴリーが存在していました¹¹。しかし、これらの境界が臨床的に曖昧であり、本質的には連続的な特性の表れであるという理解が深まったことから、DSM-5ではこれらが「自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder: ASD)」という単一の診断名に統合されました¹²。ICD-11もこのスペクトラムの考え方を採用し、診断基準の国際的な調和が図られています¹⁴。この「カテゴリー」から「スペクトラム(連続体)」への移行は、単なる専門用語の変更ではありません。それは、発達障害を「あるかないか」の二元論で捉えるのではなく、程度の差や多様な現れ方を持

一つの連続体として理解するという、より現実に応じたパラダイムシフトを意味します。この考え方は、診断から漏れてしまっていた人々を救い、個々の特性をより柔軟に捉えることを可能にし、後述するニューロダイバーシティという社会的な概念の科学的土台ともなっています。

ADHDに関しても、DSM-5とICD-11は多くの点で足並みを揃えています¹⁵。例えば、症状が現れる年齢の上限が、DSM-IVの「7歳以前」から「12歳以前」に引き上げられました⁹。これは、学童期以降のより複雑な社会的・学業的課題に直面して初めて特性が顕在化するケースが少なくないという臨床的現実を反映したものです。また、症状が家庭、学校、職場など「複数の状況」で存在することが診断要件として明確化され、一時的・状況的な困難との鑑別がより厳密になりました¹⁵。

ただし、両マニュアルには微妙ながら重要な違いも存在します。例えば、ICD-11はADHDの症状を単に羅列するDSM-5と異なり、不注意症状を3つ、多動・衝動性症状を4つのグループに分けて説明しており、臨床家にとってより直感的で理解しやすい構造になっています¹⁵。さらにICD-11には「正常との境界」という項目が設けられており、特に幼児期に見られる多動性などが正常な発達の範囲内である可能性に言及し、安易な診断への警鐘を鳴らしています¹⁵。

限局性学習症(SLD、学習障害)については、DSM-5では知的能力に問題がないにもかかわらず、「読み(ディスレクシア)」「書き(ディスグラフィア)」「計算(ディスカリキュリア)」といった特定の学業的技能の習得と使用に著しい困難が6ヶ月以上持続することが基準とされています¹⁶。

表1.1: 主要診断基準の比較概要 (DSM-5 vs. ICD-11)

障害	中核的診断領域	DSM-5の基準(要約)	ICD-11の基準(要約)	主な違いと意義
自閉スペクトラム症 (ASD)	1. 社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的な欠陥 2. 限定された反復的な様式の行動、興味、活動	2つの領域における複数の基準を満たすことが必要。発達早期から症状が存在。アスペルガー障害等を統合し、単一のスペクトラム診断へ。重症度(必要な支援のレベル)を記述。	DSM-5と同様にスペクトラム概念を採用。知的発達の障害や言語の機能的障害の有無を併記するコードシステムを導入。	ICD-11は併存疾患をコードで詳細に記述できるため、より個別化された診断プロファイルの作成が可能。両者ともスペクトラム概念を採用し、国際的なコンセンサスを反映。
注意欠如・多動症	1. 不注意 2. 多動	9つの不注意症	不注意、多動・衝	ICD-11の症状記

(ADHD)	性・衝動性	状、9つの多動性・衝動性症状のうち、それぞれ6つ(17歳以上は5つ)以上が6ヶ月以上持続。12歳以前に複数の症状が存在。症状が2つ以上の状況で認められる。	動性の持続的なパターン。DSM-5と同様に12歳以前の発症と複数状況での存在を要件とする。症状を機能的なグループに分けて記述。「正常との境界」に関する記述がある。	述はより構造化されており、臨床的に記憶しやすい ¹⁵ 。また、「正常との境界」の項目は過剰診断を防ぐための重要な視点を提供する ¹⁵ 。
--------	-------	---	---	--

1.3 複雑な病因: 遺伝か環境か、を超えて

発達障害の原因は、「遺伝か、環境か」という単純な二項対立で語ることはできません。現代の科学が示すのは、強力な遺伝的素因と、多様な環境要因が複雑に絡み合う「多因子モデル」です³。

遺伝的要因が強く関与することは、双生児研究などから明らかになっています。しかし、特定の「自閉症遺伝子」や「ADHD遺伝子」が一つだけ存在するわけではありません¹⁹。実際には、数百もの遺伝子が関与しており、それらの変異の組み合わせが、個人の「発症しやすさ」や「特性の現れやすさ」といった遺伝的背景を構成していると考えられています¹⁸。これは「多因子遺伝」と呼ばれ、単一遺伝子疾患とは異なる複雑な遺伝形式です³。

かつて、特に自閉症研究においては遺伝的要因が過大に評価される傾向がありました。これは「親の育て方が原因」という心因論を否定する上では役立ちましたが、一方で「遺伝だから仕方がない」という宿命論や、家族への新たなスティグマを生む側面もありました¹⁹。しかし、近年の大規模な研究では、遺伝的要因だけでは説明できない部分、すなわち環境要因の重要性がますます明らかになっています²⁰。

環境要因の中でも特に注目されているのが、脳が急速に発達する胎児期から乳幼児期にかけての曝露です¹⁹。この時期の脳は非常に脆弱であり、多くの化学物質が血液脳関門を通過しやすいため、影響を受けやすいとされています¹⁹。具体的には、以下のような要因がリスクを高める可能性が指摘されています。

- 周産期要因: 受胎時の親の年齢(特に父親)、妊娠中の合併症や栄養状態、出産時のトラブルなど³。
- 環境化学物質への曝露: 農薬(有機リン系、ネオニコチノイド系など)、PCB、鉛、水銀といった有害な化学物質への曝露が、脳の発達に重要な神経伝達物質のシステムやホルモン系を攪乱する可能性が、多くの疫学研究や実験で示唆されています¹⁹。

- 遺伝子と環境の相互作用：重要なのは、これらの要因が独立して作用するのではなく、相互に影響し合うという点です。例えば、ある特定の遺伝子多型を持つ母親が大気汚染に曝露した場合にのみ、子どもの自閉症リスクが顕著に高まるという研究報告があります²⁰。これは、特定の遺伝的脆弱性を持つ個人が、ある環境要因に曝露されることで、初めて発症の閾値を超えるという「遺伝子-環境相互作用」の典型例です。

このように、発達障害の原因を理解することは、個々の家族を非難することから、社会全体の公衆衛生的な課題へと視点を転換させることを意味します。農薬の規制、大気汚染の改善、有害化学物質への曝露を減らすための社会的な取り組みは、単なる環境問題ではなく、次世代の脳の健康を守るための重要な予防策となりうるのです。この視点の転換は、責任の所在を個人から社会へと移し、より建設的で予防的なアプローチへの道を開きます。

第2章：発見と誤解の歴史

発達障害は現代になって生まれた新しい現象ではありません。しかし、私たちがそれらをどのように呼び、解釈してきたかは、時代と共に劇的に変化してきました。その歴史は、科学の進歩だけでなく、社会の偏見や当事者たちの闘いの物語でもあります。

2.1 古代のこだま：精神医学以前の神経多様性

近代的な診断名が生まれるずっと以前から、発達障害の特性を持つ人々はあらゆる社会に存在していました。彼らは「変わり者」「風変わりな人」あるいは神話の中で特別な役割を与えられる存在として記録されています。例えば、日本の最古の書物である『古事記』には、言葉が話すことができなかった本牟智和氣御子（ホムチワケノミコ）の記述があり、これは現代の視点から見れば自閉症や言語障害の可能性を示唆しています²²。また、日本神話における最初の神の子「ヒルコ」が3歳になっても体がぐにゃぐにゃであったという記述は、脳性麻痺などの身体的な障害を想起させます²³。中世から近世にかけては、子どもの障害が親の因果応報と見なされるなど、非科学的な解釈によって家族が苦しめられる時代もありました²⁴。これらの記録は、特性そのものは普遍的に存在してきた一方で、その解釈がいかに時代や文化に左右されてきたかを物語っています。

2.2 20世紀の「発見」：カナー、アスペルガー、そして概念の誕生

発達障害が医学的な概念として体系化されたのは20世紀半ばのことです。1943年、米国の児童精神科医レオ・カナーは、特異な行動パターンを示す11人の子どもたちを報告し、「早期幼児自閉症」と名付けました¹³。彼は、これらの子どもたちが「情緒的接触の能力を生来的に欠いている」と考え、当初は統合失調症の最も早い現れではないかと推測しました²⁶。

ほぼ時を同じくして1944年、オーストリアの小児科医ハンス・アスペルガーもまた、独自に類似した特性を持つ子どもたちについて報告し、「小児期の自閉的精神病質」と呼びました¹²。カナーとは対照的に、アスペルガーは彼らが示す特性を、知的な強みや特別な才能を含みうる安定したパーソナリティの一類型として捉えていました²⁶。彼が診た子どもたちの中には、後に天文学の教授になった者や、ノーベル文学賞を受賞したエルフリーデ・イエリネクがいたとされています²⁸。

しかし、アスペルガーの業績には暗い影が差し込んでいます。近年の歴史研究により、彼がナチス政権下で活動し、その優生思想に基づく障害児の「安楽死」計画に協力していた可能性が指摘されています²⁸。この事実は、彼の名前を冠した診断名の歴史的背景を複雑なものにしており、我々が科学史を評価する上で、その時代の倫理的・政治的文脈を無視できないことを示しています。

2.3「冷蔵庫マザー」：非難とスティグマの暗黒時代

20世紀半ば、発達障害、特に自閉症の理解は、科学的な探求から大きく逸脱し、痛ましい過ちの時代へと突入します。カナーが当初、自閉症児の親（特に母親）を知的で情動的に冷たいと記述したことに端を発し³⁴、精神分析学者のブルーノ・ベッテルハイムらによって、「冷蔵庫のように冷たい母親（refrigerator mother）」の愛情不足が子どもの自閉症を引き起こすという、心因論が広く流布されました¹³。

この理論は科学的根拠に乏しいものでしたが、当時の精神分析が支配的だった風潮に乗り、医療界や社会に深く浸透しました。その結果、母親たちは我が子の障害の原因であると非難され、計り知れない罪悪感と苦しみに苛まれました¹³。この誤った理論は、原因究明を生物学的な方向から遠ざけ、何十年にもわたって研究の進展を妨げ、何より多くの家族に癒しがたい傷を残したのです。この暗黒時代に風穴を開けたのが、自閉症の息子を持つ心理学者バーナード・リムランドでした。彼は1964年に出版した著書で、自閉症が生物学的な基盤を持つことを説得力をもって論じ、「冷蔵庫マザー」説に真っ向から反論しました³⁴。

2.4 認知革命とスペクトラムの台頭

1970年代から80年代にかけて、発達障害の理解は大きな転換点を迎えます。その中心人物が、英国の精神科医ローナ・ウィングでした³⁷。彼女は、第二次世界大戦とドイツ語の壁のために長らく埋もれていたハンス・アスペルガーの論文を再発見し、英語圏に紹介しました¹²。

ウィングの貢献は、単なる翻訳に留まりませんでした。彼女は自閉症の娘を持つ親でもあり、カナーの狭い定義では捉えきれない多くの子どもたちがいることを臨床経験から知っていました。彼女はカナーとアスペルガーの記述を統合し、自閉症が稀な精神病ではなく、「社会的相互作用」「コミュニケーション」「想像力(限定された反復的行動)」の三つの領域にわたる困難を特徴とする、広範な神経発達上の連続体(スペクトラム)であるという画期的な概念を提唱しました¹²。この「ウィングの三つ組」は、その後の診断基準の基礎となり、現代の「自閉スペクトラム症」という考え方の直接の源流となったのです。このパラダイムシフトは、原因論を「親のせい」という心因論から、脳機能の障害という生物学的なモデルへと決定的に移行させました

¹³。

2.5 日本の経験: 当事者運動と政策転換の軌跡

日本においても、発達障害の概念は1980年代頃から導入され始めましたが³⁸、当初は理解が十分に進まず、支援体制も未整備な状態が続きました。教育現場では、1969年に「情緒障害特殊学級」が設置されましたが、これは自閉症児教育の受け皿となりつつも、「情緒障害」という名称が心因性の問題との混同を生む一因ともなりました²⁵。

このような状況を大きく変えたのが、親たちによる粘り強い当事者運動でした。特に日本自閉症協会をはじめとする親の会は、「冷蔵庫マザー」説のような偏見と闘いながら、教育の場の確保や法整備を求めて長年にわたり活動を続けました⁴⁰。彼らの要求は、当初の「施設を求める」声から、やがて「自閉症児福祉法の制定」という明確な政策目標へと発展していきま

⁴⁰。

この草の根の運動は、学習障害(LD)やADHDなど他の発達障害の当事者団体とも連携を深め、大きな政治的うねりとなります⁴⁰。そして、超党派の国会議員からなる議員連盟が結成され、当事者と家族の声を反映した法案が作成されました⁴⁰。その結果、2004年12月、日本の障害者施策の歴史において画期的とされる

発達障害者支援法が全会一致で可決・成立したのです⁴⁰。これは、トップダウンの政策ではなく、当事者の「生きにくさ」を原動力としたボトムアップの advocacy が、いかにして社会システ

ムを変革しうるかを示す、力強い実例です。

科学的「発見」や政策転換は、真空状態で起こるわけではありません。それは常に、その時代の支配的な思想(精神分析など)や技術レベル、そして何よりも、現状に異を唱える人々の声によって形作られます。この歴史を学ぶことは、現在の我々の理解もまた絶対的なものではないという謙虚さを育み、社会を変える原動力がどこにあるのかを教えてください。

表2.1: 発達障害をめぐるパラダイムシフトの一世紀

年代/年	主要人物/出来事	主流となった概念/理論	意義と影響
～1940年代	(なし)	「変わり者」「親不孝」 「因果応報」など	科学的理解が存在せず、道徳的・宗教的なレッテル貼りが横行 ²⁴ 。
1943/1944年	レオ・カナー、ハンス・アスペルガー	医学的概念の誕生(早期幼児自閉症、自閉的精神病質)	初めて医学・精神医学の対象として体系的に記述された。しかし、当初は統合失調症などとの混同が見られた ²⁵ 。
1950～60年代	ブルーノ・ベッテルハイム	心因論(「冷蔵庫マザー」説)	原因を親の養育態度に求め、家族に深刻な罪悪感とスティグマを与えた。科学的研究を停滞させた暗黒時代 ¹³ 。
1964年	バーナード・リムランド	生物学的基盤の提唱	心因論に科学的根拠をもって反論。自閉症が脳機能に起因するという現代的理解への転換点となった ³⁴ 。
1981年	ローナ・ウィング	スペクトラム概念の提唱	アスペルガーの業績を再発見・統合し、自閉症を広範な連続体として捉える「スペクトラム」の考え方を提唱。現代の診断体系の基礎を築いた ¹² 。

2004年	日本の発達障害者支援法成立	権利と支援の法制化	親の会を中心とした当事者運動が実を結び、国や自治体の支援責務を明記。診断、教育、就労にわたる支援体制構築の法的根拠となった ⁴⁰ 。
2013年	DSM-5発行	スペクトラム診断の公式化	自閉症、アスペルガー障害などを「自閉スペクトラム症」に統合。科学的知見を反映し、より現実に即した診断体系へと移行した ¹³ 。

第3章: 当事者の語る世界 ― 生の経験

診断基準や歴史的変遷を理解した上で、次に不可欠なのは、そのラベルの向こう側にある「生きた経験」に耳を傾けることです。この章では、当事者やその家族の言葉を通して、神経発達の特性を持つことが何を意味するのか、その日常の現実と内面の世界を探ります。

3.1 ニューロティピカル（神経定型）社会を航海する：日々の現実

発達障害のある人々にとって、多数派であるニューロティピカルな人々によって設計された社会で生きることは、常に外国語でコミュニケーションをとり、不慣れな文化の中で暮らすようなものです。その困難は、しばしば目に見えにくく、誤解されがちです。

例えば、コミュニケーションの場面では、言葉の裏を読んだり、曖昧な表現の意図を汲み取ったりすることが困難な場合があります⁷。ある当事者（Fさん、30代男性）は、職場で上司の指示を文字通りに受け取った結果、同じミスを繰り返し、「話をちゃんと聞いていない」「別のことを考えている」と頻繁に叱責されました⁴⁶。彼の困難は「不注意」や「反抗」ではなく、コミュニケーションスタイルの違いに起因していましたが、周囲はその背景を理解できませんでした。このような経験は、自己肯定感の低下や職場での孤立に直結します。

また、社会生活は、計画を立て、優先順位をつけ、時間を管理するといった「実行機能」を絶えず要求します。これらの能力に困難があると、片付けが苦手だったり、仕事の段取りがつけら

れなかったりといった形で現れます⁶。これは「だらしなさ」ではなく、脳の前頭前野の機能的な違いによるものです。感覚の過敏さも深刻な問題となり得ます。オフィスの蛍光灯のちらつきや同僚の話し声、満員電車の圧迫感などが、耐えがたい苦痛となり、集中力を著しく削いでしまうのです⁷。

こうした日々の困難が積み重なる中で、多くの当事者が社会からの否定的なメッセージを内面化していきます。ある当事者会のブログには、発達障害のある人々が過剰なまでに謝罪する傾向があると記されています。「私が存在して、ごめんなさい」とでも言うかのように⁴⁷。上司や先輩から「ダメなやつ」「自分勝手」と言われ続けるうちに、自分自身をそのように信じ込んでしまうのです。これは、障害そのものよりも、社会の無理解や偏見がもたらす二次的な、しかし極めて深刻な「障害」と言えるでしょう。

3.2 家族の旅路：混乱から受容、そして擁護へ

子どもの発達に特性があると気づいたとき、家族、特に親は長く困難な、しかし最終的には変革的な旅を始めます。その道のりは、多くの場合、混乱と不安から始まります。

発達障害を持つ双子の娘さんを育てたある母親のブログは、その感情の揺れ動きを率直に綴っています⁴⁸。最初は娘たちを「面白い子」と感じていたものが、やがて「なんだかおかしいぞ」という違和感に変わり、「こりゃ大変だ」という認識、そして「絶望的な時」へと至ります。彼女は、自分の常識が通用しない娘たちの言動に、「だーかーらー！！！！」「普通そう思うよ！！！！」と声を荒らげてしまった過去を告白しています⁴⁸。これは、多くの親が経験する、理解できない我が子への戸惑いと葛藤の正直な表れです。

この旅の転機となるのが、しばしば「診断」です。娘たちが発達障害であると医師から告げられた時、この母親は「合点が行き、『そうだったのか、だからね、なるほど』と思った」と記しています⁴⁸。診断は、それまでの不可解だった出来事に名前と説明を与え、親を自責の念から解放する力を持つことがあります。しかし、それはゴールではありません。「それならば、という対策も、、これで取れる！！と思ったら大間違い」と彼女が書いているように、診断は新たな理解と対応の始まりに過ぎないのです⁴⁸。

真の変革は、親が「普通」の物差しを捨て、子どもの世界を子どもの視点から理解しようと努め始めたときに起こります。この母親は、娘たちの話を「よ———く話を聞いてみると、あり？どっちがおかしいんだ？」と自問し、「向き合ってみると、『確かに。。。そりゃそうだ』がいっぱいありました」と気づきます⁴⁸。この瞬間、親は子どもを「治す」対象として見るのをやめ、その子のありのままを理解し、その子が生きやすいように世界の方を調整しようとする「擁護者(アドボケート)」へと変わっていくのです。彼女は、「『わかれよう』とする努力は諦めなかった。これが

今の我ら3人の在り方につながっている」と結論づけています⁴⁸。

これらの当事者や家族の語りは、重要な示唆を与えてくれます。発達障害における最も大きな困難は、しばしば脳の特性そのものではなく、その特性と、それを受け入れる準備ができていない社会や環境との間に生じる「摩擦」にあるということです。Fさんの困難は、彼のコミュニケーションスタイルと職場の期待との間のミスマッチでした。母親の葛藤は、彼女の「普通の子育て」という期待と、娘たちの現実との間のミスマッチでした。この理解は、支援の焦点を「当事者を変える」ことから、「環境との摩擦を減らす」ことへと移行させる必要性を示唆しています。それは、同僚を教育し、コミュニケーション方法を調整し、親の期待を再構築することを意味します。この視点こそが、次章で論じる具体的な支援策と、最終章で提言するインクルーシブな社会の構築へと直接つながっていくのです。

第4章：支援からエンパワメントへ — 介入の進化

発達障害への理解が深まるにつれ、支援のアプローチもまた、単なる「問題行動の修正」から、当事者が自身の能力を最大限に発揮し、主体的に生きていくための「エンパワメント」へと進化してきました。本章では、その具体的な方法論と、根底にある理念を探ります。

4.1 合理的配慮の原則：権利としての基盤

インクルーシブな社会の根幹をなすのが、「合理的配慮 (Reasonable Accommodation)」という考え方です。これは、障害のある人が他の人々と平等に社会参加できるよう、個々の状況に応じて提供される必要かつ適当な変更や調整を指します。重要なのは、これが「慈善」や「親切」ではなく、日本の「障害者差別解消法」などに定められた、提供する側の法的・倫理的な「義務」であるという点です⁴⁹。配慮を提供しないことは、不当な差別的取扱いにあたるとされています⁴⁹。

合理的配慮は、抽象的な理念ではなく、日々の生活の様々な場面で具体化されます。

- 職場における配慮：発達障害のある社員が直面する困難に対し、多くの企業が効果的な配慮を実践しています。例えば、口頭での曖昧な指示（「なるべく早く」など）を避け、チャットツール等を用いてタスクを具体的かつ文章で伝える⁵¹。複数の指示で混乱しないよう、指示系統を一人に集約する⁵¹。聴覚過敏のある社員のために、集中したい作業中は耳栓の着用を許可したり、視覚情報に敏感な社員のためにパーテーションを設置したりする⁵¹

。また、入社後に特性が顕在化した場合でも、本人、家族、支援機関と連携し、業務内容の見直しや配置転換、雇用形態の変更などを行うことで、長期的な雇用継続を実現した事例も数多く報告されています⁵²。これらの配慮は、当事者のパフォーマンスを向上させるだけでなく、職場全体のコミュニケーションの明確化や業務プロセスの改善にも繋がり、組織全体に利益をもたらします。

- 教育現場における配慮：学習の場においても、多様な配慮が有効です。読み書きに困難（ディスレクシア、ディスグラフィア）のある児童生徒に対し、タブレット端末や音声読み上げソフト、文字を分かち書きにするなどのICT支援を活用する⁸。感覚過敏を和らげるためのイヤーマフの使用を認める⁵³。集中が難しい生徒のために、別室での試験実施や衝立の設置を許可する⁵⁴。これらの配慮は、学習機会の平等を保障し、子どもたちが本来の能力を発揮するための土台となります。

表4.1: 合理的配慮の実践ガイド

困難の領域	困難の具体例	教育現場での配慮例	職場での配慮例		
口頭指示の理解	曖昧な表現や複数の指示を一度に記憶・処理することが難しい。	・指示を一つずつ、具体的かつ簡潔に伝える。・連絡帳やホワイトボードに指示を書き出す。・視覚的な手順書（絵や写真）を用意する。	・指示は口頭だけでなく、メールやチャットで文章化して送る ⁵¹ 。	・業務マニュアルを整備し、いつでも確認できるようにする ⁵¹ 。	・指示者を一人に絞り、情報の混乱を防ぐ（指示系統の一本化） ⁵¹ 。
感覚過敏	特定の音、光、匂い、触覚などが苦痛で、集中を妨げる。	・イヤーマフやノイズキャンセリングヘッドホンの使用を許可する ⁵³ 。	・座席を教室の隅など、刺激の少ない場所に調整する。・蛍光灯の光を和らげるフィルターを設置する。	・静かな場所で作業できる座席配置や、個室の利用を許可する ⁵¹ 。	・電話の音量が調整できる、あるいは光で知らせる電話機を導入する。・強い香水などの使用に関する職場ルールを設ける。
時間管理・優	何から手をつければよいか	・一日の活動を絵や文字で	・1日の業務スケジュールを	・タスク管理	

先順位付け	分からず、計画的に物事を進めるのが苦手。	示した視覚的なスケジュールを提示する。・タイマーを使い、活動の切り替えを予告する。・大きな課題を小さなステップに分解して提示する。	本人と上司で確認し、優先順位を明確にする ⁵¹ 。	ツール(Trello, Asana等)を活用する。 ・一つの作業が終わってから次の指示を出すなど、マルチタスクを避ける ⁵¹ 。
社会的文脈の理解	相手の表情や声のトーンから意図を読み取ったり、暗黙のルールを理解したりするのが難しい。	・「友達と仲良く」ではなく「おもちゃは順番に使おうね」のように、期待する行動を具体的に教える。・ソーシャルストーリーを用いて、特定の社会場面での適切な行動を事前に学習する。	・「空気を読んで」ではなく、「Aの件について、BさんにCという内容で報告してください」と具体的に指示する。 ・会議のアジェンダを事前に共有し、発言内容を準備する時間を与える。 ・定期的な1on1ミーティングで、業務上の疑問や人間関係の悩みを相談できる時間を確保する ⁵¹ 。	
読み書きの困難	文字を読むのが遅い、正確でない。文章を書くのに時間がかかる、誤字が多い。	・音声教材やデジタル教科書の使用を許可する ⁸ 。	・板書の代わりにタブレットでの写真撮影を許可する。・試験時間を延長する、または口頭での解答を認める。	・会議の議事録作成の代わりに、録音を許可する。・報告書作成などを、テンプレートを用いて行えるようにする。・音声入力ソフトの利用を許可

				する。
--	--	--	--	-----

4.2 エビデンスに基づいた療育・教育アプローチ

合理的配慮と並行して、個々のスキル向上や適応を支援するための専門的なアプローチも発展してきました。中でも、科学的エビデンスが豊富な二つのアプローチが広く知られています。

- **応用行動分析 (Applied Behavior Analysis: ABA)** : ABAは、行動分析学の原理を用いて、望ましい行動を増やし、困難な行動を減らすことを目指す、非常に体系的なアプローチです⁵⁵。その特徴は、行動の「前後の状況」を分析し、行動の直後に本人にとって好ましい結果（褒める、好きなものを与えるなど）を提示する「強化」という手続きを用いることで、学習を促進する点にあります⁵⁵。ABAは、言語能力や社会性の向上、問題行動の低減などにおいて高い効果が多くの研究で示されており、特に米国などでは自閉症児への標準的な早期療育として医療保険が適用されるほど普及しています⁵⁵。
- **TEACCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication-handicapped Children)** : TEACCHは、ノースカロライナ大学で開発された、自閉症のある人々とその家族への生涯にわたる支援プログラムです⁵⁹。その中核をなすのが「構造化」という考え方です。これは、自閉症のある人が持つ「視覚優位性」や「見通しの立たなさが不安に繋がる」といった特性を理解し、物理的な環境や一日のスケジュール、作業の手順などを、絵や写真、文字などを用いて視覚的に分かりやすく構成するアプローチです⁶⁰。TEACCHの哲学は、自閉症を「治療」すべき欠陥ではなく、固有の「文化」として捉え、本人を変えようとするのではなく、環境を本人に適合させることで、その人が持つ能力を最大限に引き出すことを目指します⁵⁹。

ABAとTEACCHは、対立するものではなく、多くの現場で相互補完的に用いられています。しかし、その根底にある哲学には、支援をめぐる重要な論点を反映した違いが見られます。ABAは行動そのものを変えることに焦点を当てるのに対し、TEACCHは環境を変えることを優先します。この違いは、「当事者が多数派社会に適応（ノーマライゼーション）できるよう訓練すべきか」それとも「社会が当事者の特性に合わせて変わる（アコモデーション）べきか」という、より大きな哲学的問いを映し出しています。

自閉症の当事者コミュニティ内では、この点について活発な議論があります。ABAの有効性を認めつつも、一部にはそのアプローチが過度な「正常化」を強いるものではないかという批判も存在します。一方で、TEACCHの理念は、後述するニューロダイバーシティの考え方と親和性が高いと見なされています。最も効果的かつ倫理的な支援とは、おそらくこの両極端の間にあるのでしょう。つまり、ABA的なアプローチを用いて、本人が社会で生きていく上で不可欠なスキルやストレス対処法を学ぶことを支援しつつ、同時に、TEACCHやニューロダイバーシティ

の思想に基づき、社会全体のシステムや人々の意識を変革していく。真に包括的な支援計画は、個人とその世界の両方に働きかける必要があるのです。

第5章：パラダイムシフト — ニューロダイバースな社会へ

最終章では、発達障害を「欠陥」や「治療すべき対象」として捉える従来の医学モデルから脱却し、それを人間の自然で価値ある多様性の一部として捉える「ニューロダイバーシティ」という、より進歩的な視点を提示します。このパラダイムシフトは、単なる社会正義の問題ではなく、社会全体の革新と成長の源泉となりうるものです。

5.1 成功の再定義：強みに基づく視点

発達障害を「できないこと」のリストとして捉える欠陥モデルは、当事者が持つ独自の強みや才能を見過ごさせてしまいます。しかし、視点を転換すれば、これらの特性が並外れた能力の源泉となりうるのが分かります。

その最も象徴的な例が、ノーベル賞受賞者に見られる発達障害の特性です。2002年にノーベル経済学賞を受賞したヴァーノン・スミスは、自身がアスペルガー症候群の特性を持つと公言しており、その成功の要因として「完全に世界を遮断して集中モードに入れる」能力を挙げています⁶³。この「過集中」は、ADHDやASDの当事者によく見られる特性であり、特定の分野で深い専門性を築く上で強力な武器となります。

歴史を振り返れば、アルベルト・アインシュタイン、トーマス・エジソン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトなど、人類の歴史を塗り替えた偉人たちの多くが、現代の診断基準で見れば発達障害の特性を持っていたと推測されています⁶⁶。彼らの常識にとらわれない発想、特定の主題への執拗なまでの探求心、既存の枠組みを打ち破る衝動性こそが、彼らの偉大な業績の原動力だったのかもしれません。

現代においても、実業家のイーロン・マスク、タレントの黒柳徹子さん、ミュージシャンの米津玄師さんなど、多くの著名人が自らの発達障害を公表し、その特性を強みとして社会で活躍しています⁶⁷。これらの事例は、「障害＝できない」という固定観念を覆し、適切な環境と理解があれば、発達障害の特性が類まれな才能として開花する可能性を力強く示しています。

5.2 ニューロダイバーシティ運動:新たな公民権運動の地平

「ニューロダイバーシティ(Neurodiversity、神経多様性)」とは、脳や神経の働き方の違いを、生物多様性が生態系にとって重要であるのと同様に、人類にとって自然で価値のある変異であると捉える概念です⁶⁸。この言葉は、1990年代後半、自閉症の当事者たちがインターネットの黎明期にオンラインコミュニティで繋がり、自らの経験を語り合う中で生まれました⁷¹。それまで孤立していた彼らが、自分たちの「生きにくさ」が個人的な欠陥ではなく、ニューロティピカル(神経定型者)が多数派を占める社会の側にあるのではないか、という政治的な意識に目覚めたのです。

この運動の核心は、発達障害を単に肯定的に言い換える「リフレーミング」ではなく、人間理解の根本的な「パラダイムシフト」を促す点にあります⁷¹。それは、従来の医学モデル、すなわち「正常」からの逸脱であり「治療・矯正」すべき「病理」という見方から、社会モデル、すなわち社会の側に存在する障壁(バリア)によって困難を強いられている「少数派(マイノリティ)」という見方への転換を意味します。

自閉症の当事者であるジム・シンクレアが1993年に発表したエッセイ「私たちが悼むな(Don't Mourn For Us)」は、この運動の精神を象徴しています。彼は、親が子どもの自閉症を悲劇と捉えるのは、自閉症そのものではなく、「普通の子ども」を望んだ親自身の期待が裏切られたことに起因すると指摘し、「自閉症は生き方そのものであり、それを取り除くことは、その人自身を消し去ることだ」と訴えました⁷²。この思想は、ニューロダイバーシティが単なる障害の受容ではなく、アイデンティティの肯定であることを明確に示しています。

5.3 インクルーシブな未来の実践:教育と職場

ニューロダイバーシティの理念は、具体的な社会制度の変革へと繋がりがつあります。

- インクルーシブ教育:教育分野では、障害の有無にかかわらず、すべての子どもが同じ教室で共に学ぶ「インクルーシブ教育」への移行が世界の潮流となっています。これは、子どもを能力別に分離するのではなく、通常学級の中で個別の支援を提供することで、多様な子どもたちが互いの違いを学び、尊重し合う共生社会の基盤を築くことを目指すものです。カナダのニューブランズウィック州のように、特殊学校制度を廃止し、完全なインクルーシブ教育を実現している地域もあります⁷⁴。日本でも、神奈川県「インクルーシブ教育実践推進校」や大阪府の「ともに学び、ともに育つ」教育など、先進的な取り組みが進められています⁷⁵。
- ニューロダイバースな職場:ビジネスの世界でも、ニューロダイバーシティは重要な経営

戦略として認識され始めています。これは単なる企業の社会的責任(CSR)やダイバーシティ&インクルージョン(D&I)活動の一環ではありません。Google、Microsoft、SAPといったグローバル企業や、日本のオムロン、デジタルハーツといった企業は、発達障害のある人材が持つ特有の能力、例えば高い集中力、パターン認識能力、細部への注意力などが、IT、サイバーセキュリティ、品質管理といった分野で極めて高い価値を持つことを見出し、専門の採用プログラムを設けています⁷⁶。彼らは、面接の質問を事前に提供する、職務内容を明確化する、静かな職場環境を整えるといった合理的な配慮を行うことで、neurodivergent な人材が能力を最大限に発揮できる環境を構築しています⁷⁹。

このような取り組みは、画一的な人材(レンガ)を積み上げた組織よりも、多様な特性を持つ人材(石垣)が組み合わさった組織の方が、変化の激しい現代社会においてより強靱で革新的であるという認識に基づいています⁷⁶。ニューロダイバーシティを推進しない企業は、貴重な才能と競争優位性を自ら放棄しているに等しいのです。この視点は、インクルージョンを「コスト」ではなく「投資」として捉え直す、強力な論拠となります。

結論と提言：インクルーシブな明日を築くために

結論：知見の統合

本報告書を通じて、我々は発達障害をめぐる理解の軌跡をたどってきました。その核心的な結論は、以下の三点に集約されます。

1. 発達障害は、性格や育て方の問題ではなく、脳機能の多様性に根差す神経生物学的な状態である。この科学的真実は、あらゆる議論の出発点であり、非難やスティグマを払拭するための最も強力な武器です。
2. 我々の理解は、非科学的な「非難の時代」から、生物学的な「解明の時代」を経て、現在は「権利とインクルージョンの時代」へと移行しつつある。この歴史的変遷は、当事者とその家族による粘り強い advocacy が社会と科学を動かしてきた証左です。
3. 未来は、発達障害を「欠陥」として管理・修正するのではなく、「ニューロダイバーシティ（神経多様性）」として社会の貴重な資産と捉え、その能力を最大限に活かす社会の構築にある。これは、社会正義の要請であると同時に、経済的・文化的な革新を促す戦略的な選択でもあります。

提言：実効性のある政策に向けて

これらの結論に基づき、日本および国際社会が取り組むべき政策課題として、以下の点を提言します。これらは、専門家や当事者団体からの提言を統合したものです⁵⁰。

1. ライフステージを通じた切れ目のない支援体制の構築：

乳幼児期の早期発見・早期療育から、学齢期のインクルーシブ教育、青年期の就労移行支援、成人期の雇用継続支援、そして高齢期の介護保険サービスとの連携まで、人生のあらゆる段階で支援が途切れることのない、一貫したサポートシステムを確立する必要があります⁸⁵。そのためには、厚生労働省、文部科学省、経済産業省といった省庁間の縦割りを排し、情報を共有し連携する司令塔機能が不可欠です⁸⁴。

2. 「合理的配慮」から「ユニバーサルデザイン」への発想転換：

個別の「合理的配慮」は不可欠ですが、それだけでは事後対応に留まります。教育カリキュラム、職場環境、公共サービス、情報アクセスなど、社会のあらゆるシステムを設計する段階から、多様な神経学的特性を持つ人々が利用しやすい「ユニバーサルデザイン」の考え方を導入することが求められます。これは、結果としてすべての人にとってより使いやすく、分かりやすい社会を創出します。

3. 当事者主体の意思決定支援とエンパワーメント：

支援のあり方は、支援者が一方的に決めるものであってはなりません。当事者自身が自らの人生に関する決定を行う権利を保障し、そのプロセスを支援する「意思決定支援」の制度化が重要です⁸⁵。また、政策立案やサービス評価のプロセスに、当事者団体の参画を制度的に保障し、その活動を財政的に支援することで、真にニーズに即した施策が実現します⁸⁵。

4. エビデンスに基づく支援の普及と人材育成：

ABAやTEACCHのような科学的根拠のある支援プログラムが、地域格差なく、必要な人がアクセスできるよう、公的なサービスとして普及させる必要があります。同時に、これらの支援を質の高いレベルで提供できる専門家（医療、教育、福祉、心理の各分野）を育成するための教育・研修体制の整備が急務です⁵⁰。

行動への呼びかけ

インクルーシブな社会の実現は、政府や専門家だけの仕事ではありません。それは、社会を構成する私たち一人ひとりの意識と行動の変革にかかっています。

- 個人として: 自らの内にある無意識の偏見に気づき、「普通」という物差しを問い直すこと。発達障害に関する正確な知識を学び、誤った情報や偏見に基づく言説に同調しないこと。
- 教育者として: すべての子どもが持つ多様な学び方とニーズを尊重し、インクルーシブな教室運営を実践すること。困難を抱える子どもの行動の背景にあるものを理解しようと努め、罰ではなく支援で応えること。
- 雇用主として: 採用プロセスや職場環境、マネジメント方法を見直し、ニューロダイバージェントな人材が持つ独自の才能を積極的に発掘し、活かすこと。それをリスクではなく、組織の競争力を高めるための投資と捉えること。
- コミュニティとして: 当事者とその家族が孤立することなく、安心して暮らせる地域社会を築くこと。発達障害に関する啓発活動を支援し、誰もが自分らしくいられる居場所を作ること。

発達障害は、誰か一部の人の「問題」ではありません。それは、私たちの社会が、その多様性と創造性をどれだけ豊かに育むことができるかを問う、私たち全員の「課題」であり「機会」なのです。この報告書が、そのための建設的な対話と行動の一助となることを心から願います。

付録

付録A: よくある誤解と科学的回答(Q&A)

Q1. 発達障害は「親の育て方」や「愛情不足」が原因ですか？

A1. いいえ、全く違います。発達障害は、脳機能の発達に関わる生まれつきの特性です³。かつて「冷蔵庫マザー」説のような誤った心因論が存在しましたが、現代の科学はこれを完全に否定しています¹³。原因は、複雑な遺伝的要因と様々な環境要因の相互作用にあると考えられています³。親の育て方が原因で発達障害になることはありません。

Q2. 発達障害は「甘え」や「わがまま」ではないのですか？

A2. 違います。発達障害の特性として見られる行動(例: 集中が続かない、こだわりが強い、感情のコントロールが難しい)は、本人の意図的な「わがまま」や「努力不足」ではありません²。これらは、実行機能や感覚処理、社会的認知といった脳機能の違いから生じる、本人にとってもコントロールが難しいものです。その行動の背景にある神経学的な困難を理解し、支援することが重要です。

Q3. 最近、発達障害の人が増えているように感じますが、なぜですか？

A3. 診断される人が増えているのは事実です。文部科学省の調査では、特別な教育的支援を必要とする小中学生の割合は2012年の6.5%から2022年には8.8%に増加しています⁸⁸。この増加には複

数の要因が考えられます。

1. 認知度の向上:社会全体で発達障害への理解が広まり、これまで見過ごされてきた人々が診断・支援に繋がるようになった⁸⁸。
2. 診断基準の変更:スペクトラムという考え方の導入などにより、診断の範囲がより現実に即したものになった¹³。
3. 環境要因の影響:一部の研究では、環境化学物質への曝露増加などが、実際の発生率の上昇に関与している可能性も指摘されていますが、これについてはさらなる研究が必要です²⁰。

「急に増えた」のではなく、これまで「見えなかった」あるいは「違う名前と呼ばれていた」人々が、正しく認識されるようになった側面が大きいと言えます。

Q4. 発達障害は治りますか？

A4. 発達障害は病気ではなく、生まれつきの脳の特性なので、「治る」という概念は適切ではありません⁸。しかし、療育や教育、環境調整、薬物療法などによって、特性に伴う困難を軽減し、社会生活での適応能力を高めることは十分に可能です⁸。支援の目標は、特性を「消す」ことではなく、本人がその特性を理解し、強みを活かしながら、自分らしく幸福に生きていけるようにすることです。

Q5. ワクチンが自閉症の原因になるという話を聞いたことがあります、本当ですか？

A5. いいえ、それは科学的に完全に否定されています。かつて、MMR(麻疹・おたふくかぜ・風疹)ワクチンと自閉症の関連を示唆した論文が発表されましたが、その後の大規模な追跡研究によって、関連性は一切ないことが証明されています。元の論文は、データ捏造などの不正があったとして撤回されており、医学界・科学界では「ワクチンが自閉症の原因になることはない」というのが確定的なコンセンサスです。

付録B: 信頼できる情報源・リソース集

【日本の主要な公的機関・研究センター】

- 国立精神・神経医療研究センター(NCNP)
 - ウェブサイト: <https://www.ncnp.go.jp/>
 - 概要: 日本の精神・神経疾患に関する中核的な研究・医療機関。特に精神保健研究所の知的・発達障害研究部では、最新の研究情報や疾患に関する正確な解説を提供しています⁸。
- 発達障害情報・支援センター(国立障害者リハビリテーションセンター)
 - ウェブサイト: <http://www.rehab.go.jp/ddis/>
 - 概要: 発達障害に関する信頼性の高い情報を集約し、当事者、家族、支援者向けに分かりやすく提供しています。
- 厚生労働省: 発達障害の理解のために
 - ウェブサイト: <https://www.mhlw.go.jp/seisaku/17.html>

- 概要: 国の施策や発達障害の基本的な定義、支援に関する情報をまとめています⁴。
- 文部科学省: 特別支援教育
 - ウェブサイト: https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/index.htm
 - 概要: インクルーシブ教育や発達障害のある児童生徒への教育支援に関するガイドラインや資料が公開されています。

【主要な当事者・家族団体】

- 一般社団法人 日本自閉症協会
 - ウェブサイト: <http://www.autism.or.jp/>
 - 概要: 日本で最も歴史のある自閉症の当事者・家族団体の一つ。発達障害者支援法の成立にも大きく貢献しました⁴⁰。
- NPO法人 日本発達障害ネットワーク(JDDネット)
 - ウェブサイト: <https://jddnet.jp/>
 - 概要: 自閉症、LD、ADHDなど、様々な発達障害の当事者・支援団体が連携するネットワーク組織⁴⁰。
- NPO法人 えじそんくらぶ
 - ウェブサイト: <https://www.e-club.jp/>
 - 概要: ADHDのある子どもと大人のための支援団体。

【国際的な機関】

- 世界保健機関(WHO)
 - ウェブサイト: <https://www.who.int/>
 - 概要: 国際疾病分類(ICD)を策定しており、精神保健に関する国際的な基準や情報を提供しています。
- Autism Self Advocacy Network (ASAN)
 - ウェブサイト: <https://autisticadvocacy.org/>
 - 概要: ニューロダイバーシティの理念を掲げる、米国を拠点とする自閉症当事者によるアドボカシー団体。

【推薦図書(入門)】

- 『自閉症の僕が跳びはねる理由』東田直樹 著
 - 概要: 自閉症当事者の内面世界を、彼自身の言葉で綴った画期的な一冊。世界中で翻訳され、多くの人々の自閉症理解を変えました。
- 『発達障害』岩波明 著(文春新書)
 - 概要: 精神科医の立場から、ASD、ADHD、LDなどの主要な発達障害について、最新の医学的知見を基に平易に解説した入門書。
- 『私たちは脳の多様性にどう向き合うか: 神経科学、自閉症、そして社会の未来』スティーブ・シルバーマン 著
 - 概要: ニューロダイバーシティの歴史と概念を、ジャーナリストの視点から丹念な取材

に基づいて描いたノンフィクションの傑作。自閉症の歴史を理解する上で必読の書です。

引用文献

1. 発達障害って、なんだろう？ - 政府広報オンライン, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.gov-online.go.jp/featured/201104/>
2. 発達障がい施策の充実に関する提言書(素案) - 松本市, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/22879.pdf>
3. 発達障害は遺伝する？ 兄弟間・親子間の確率など気になる疑問を分かりやすく解説 - 療育biz, 7月 19, 2025にアクセス、<https://ryoikubiz.com/contents/5/138>
4. 政策レポート(発達障害の理解のために) - 厚生労働省, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.mhlw.go.jp/seisaku/17.html>
5. 発達障害とは？日本の現状に加え、支援体制や関連法案などを解説, 7月 19, 2025にアクセス、<https://mannen.jp/patchtheworld/9835/>
6. 発達障害とは, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/486245.pdf>
7. 発達障害の理解 ～メンタルヘルスに配慮すべき人への… - 厚生労働省, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000633453.pdf>
8. 発達障害(神経発達症) | こころの情報サイト, 7月 19, 2025にアクセス、<https://kokoro.ncnp.go.jp/disease.php?@uid=MbkmlbVbTEhSpxyE>
9. 大人の発達障害の診断における心理検査の役割と課題 | 神戸元町 三ノ宮 仕事とこころのクリニック, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.shigoto-kokoro-clinic.com/2025/04/03/%E6%88%90%E4%BA%BAasd%E3%83%BBadhd%E8%A8%BA%E6%96%AD%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%BF%83%E7%90%86%E6%A4%9C%E6%9F%BB%E3%81%A%E5%BD%B9%E5%89%B2%E3%81%A8%E8%AA%B2%E9%A1%8C/>
10. 1. 発達障害とは——定義・分類を含めた臨床特徴(小児科 63巻11号) | 医書.jp, 7月 19, 2025にアクセス、<https://webview.isho.jp/journal/detail/abs/10.18888/sh.0000002334>
11. 1「発達障害」とは、どのような障害か～医学領域での概念～, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.tetras.uitec.jeed.go.jp/files/kankoubutu/a-119-02.pdf>
12. アスペルガー症候群の歴史 - ときじく心理オフィス, 7月 19, 2025にアクセス、<https://tokijiku.net/asperger-syndrome-of-history/>
13. 子どもたちの発達支援～自閉症スペクトラム障がい(ASD)の歴史, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.serio-corp.com/me/upload/files/1622081336phplm5B4z/.pdf>
14. ICDの改訂における発達障害の位置づけについて, 7月 19, 2025にアクセス、https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/download_pdf/2013/201305032A.pdf
15. 各論① - ICD-11における神経発達症群の診断について, 7月 19, 2025にアクセス、<https://journal.jspn.or.jp/jspn/openpdf/1230040214.pdf>
16. 学習障害(LD)とは | 発達障害におけるADHD、ASD、LDの診断基準、年齢別の症状と対応, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.blog.crn.or.jp/lab/dev-disorder/ld.html>
17. 発達障害は遺伝する？ 遺伝との関係性と考えられる原因とは - ステラ幼児教室, 7月 19, 2025にアクセス、https://www.stella-edu.com/column/c_hattatsuiden/
18. 発達障害と遺伝との関係性は？ 原因は？ - LITALICOジュニア, 7月 19, 2025にアクセ

- ス、<https://junior.litalico.jp/about/hattatsu/news/detail/developmental003/>
19. 自閉症・ADHD など発達障害増加の原因としての 環境化学物質, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.actbeyondtrust.org/wp-content/uploads/2012/02/Kagaku_201306_Kimura_Kuroda.pdf
 20. 自閉症・ADHD など発達障害の原因としての環境化学物質 The ..., 7月 19, 2025にアクセス、https://www.asahikawa-med.ac.jp/dept/mc/healthy/jsce/jjce23_1_1.pdf
 21. 5-1454 環境化学物質によるASD等の神経発達障害と環境遺伝ーエピゲノム相互作用の解明| 平成28年度 | ネットde研究成果報告会 | 環境研究・技術 情報総合サイト - 環境省, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.env.go.jp/policy/kenkyu/special/houkoku/data_h28/5-1454.html
 22. 障害者の歴史 先土器時代～鎌倉時代 - アクアマルシェ, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://aqua-marche.com/%E9%9A%9C%E5%AE%B3%E8%80%85%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E3%80%80%E5%85%88%E5%9C%9F%E5%99%A8%E6%99%82%E4%BB%A3%EF%BD%9E%E9%8E%8C%E5%80%89%E6%99%82%E4%BB%A3/>
 23. 日本の障害者の歴史, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/rehab/r054/r054_002.html
 24. 江戸中後期における〈障害児〉・〈奇形児〉の捨て子や子殺しに対する認識 - 九州大学, 7月 19, 2025にアクセス、
https://api.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4377790/2_p015.pdf
 25. 第I章 20世紀の自閉症教育の展開と歴史 - 独立行政法人 国立特別 ..., 7月 19, 2025にアクセス、https://www.nise.go.jp/josa/kankobutsu/pub_b/b-163/b-163_03.pdf
 26. The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA, 7月 19, 2025にアクセス、https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/70027/mrp_050_A095.pdf
 27. 自閉症 - Wikipedia, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E9%96%89%E7%97%87>
 28. Hans Asperger - NPO法人ELMO, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://elmo-npo.com/1-1-2-1-1-1-1-1-1>
 29. The History of Autism Part I – Origins of Autism, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.elsforautism.org/9262-2/>
 30. Hans Asperger - Wikipedia, 7月 19, 2025にアクセス、
https://en.wikipedia.org/wiki/Hans_Aasperger
 31. Media Bias Means International Asperger Day Passed Unnoticed - Bianet, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://bianet.org/haber/media-bias-means-international-asperger-day-passed-unnoticed-112955>
 32. AUTISM SPECTRUM - Richards on the Brain, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.richardsonthebrain.com/autism-spectrum>
 33. ハンス・アスペルガー - Wikipedia, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%AC%E3%83%BC>
 34. 冷蔵庫マザー - Wikipedia, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%86%B7%E8%94%B5%E5%BA%AB%E3%83%9E%E3%82%B6%E3%83%BC>

35. ASD世界史「冷蔵庫マザー理論の一生」～「親の教育が悪いからASDになる」 - 障害者ドットコム, 7月 19, 2025にアクセス、
https://shohgaisha.com/column/grown_up_detail?id=1577
36. 自閉症研究の歴史と原因論① | SBSK自然分娩推進協会 - note, 7月 19, 2025にアクセス、
https://note.com/sbsk_momotaro/n/nf27682061cf8
37. 15分でわかる自閉症スペクトラムの歴史 | Tokio 's blog - Tokiou, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.tokiou.com/tokiblog/15%E5%88%86%E3%81%A7%E3%82%8F%E3%81%8B%E3%82%8B%E8%87%AA%E9%96%89%E7%97%87%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%82%AF%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%A0%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2/>
38. 発達障害の現状から学ぶ - 日本子ども学会, 7月 19, 2025にアクセス、
https://kodomogakkai.jp/m/pdf/vol_7_konishi.pdf
39. 歴史的業績を残した人物に関する発達障害 についての研究, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.tiu.ac.jp/about/research_promotion/kiyou/pdf/15_clinicalpsychology_2.pdf
40. 発達障害者支援法の制定 - researchmap, 7月 19, 2025にアクセス、
https://researchmap.jp/nakayamatadamasa/published_papers/1714145/attachment_file.pdf
41. 2005年4月 発達障害者支援法が成立しました - 日本児童青年精神医学会, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://child-adolesc.jp/proposal/2005-04-01/>
42. 「発達障害者支援法成立の要因」, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://cuc.repo.nii.ac.jp/record/5862/files/PSR20190004%E6%9D%BE%E6%9C%AC.pdf>
43. 第4 日本の障害者施策の経緯: 文部科学省, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1295934.htm
44. 発達障害者支援法の改正, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h29hakusho/zenbun/pdf/s2_2-1.pdf
45. 【セミナー解説】発達障害と医療 法制定後の20年を振り返る - Kaien, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.kaien-lab.com/useful/5-welfare/medic20years/>
46. みんなのストーリー16 - 武田薬品工業 | 「大人の発達障害ナビ」, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.otona-hattatsu-navi.jp/experience/interview16/>
47. ブログ - 横浜 発達障害 当事者会, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.tekutekukai.org/%E3%83%96%E3%83%AD%E3%82%B0/>
48. 発達障害の子供と向き合う～諦めない！！ | 秦万里子オフィシャル ..., 7月 19, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/hatamariko/entry-12839053763.html>
49. 合理的配慮に関する国内企業 における実践事例集 - 経済産業省, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/shougai/r6fy_gourijirei.pdf
50. 神戸市における発達障害支援の取り組みについての 提 言 書, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.city.kobe.lg.jp/documents/417/03teigen.pdf>
51. 発達障害のある方の「合理的配慮」事例集 - 就労移行支援ディーキャリア, 7月 19, 2025にアクセス、
https://dd-career.com/column_data/07/
52. 障害者への合理的配慮好事例集 - 厚生労働省, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.mhlw.go.jp/content/11600000/001077721.pdf>
53. 発達障害 合理的配慮等具体例データ集(合理的配慮サーチ) - 内閣府, 7月 19, 2025

- にアクセス、https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/jirei/index_hattatsu.html
54. 【解説記事】インクルーシブ教育とは？登場の背景と実現で得られる良い点、取り組みを紹介, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.kyowakirin.co.jp/stories/20220412-02/index.html>
55. 応用行動分析 - ABA SPEAKS, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.abeforeverybody.org/aba%E3%81%A8%E3%81%AF>
56. ABA(応用行動分析学)を用いた療育の概要と具体的な効果とは？ - AIセラピスト co-mii(コミー), 7月 19, 2025にアクセス、<https://co-mii.com/column/170/>
57. ABA(応用行動分析)とは？ASTEPでの実践例と評価について解説します！, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.astep-kyoto.com/aba-6410>
58. 我が国における、自閉症児に対する「応用行動分析による療育」の検証に関する研究, 7月 19, 2025にアクセス、
https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/download_pdf/2014/201446004A.pdf
59. 自閉症児支援の新技术「TEACCHプログラム」とは？包括的な理念と支援を解説, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://passpo.net/2024/06/18/what-is-the-teacch-program-a-new-approach-for-supporting-children-with-autism/>
60. 行動分析学からみた TEACCHプログラム - CORE, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://core.ac.uk/download/pdf/236640968.pdf>
61. 自閉症児のためのカリキュラムに関する研究 - 神奈川県内の県立学校, 7月 19, 2025にアクセス、<https://edu-ctr.pen-kanagawa.ed.jp/shuuroku25/11.pdf>
62. TEACCH の今日的課題, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.ritsumeihuman.com/uploads/publications/102/14_3.pdf
63. The Up-Side - Teach Me About Autism, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.teachmeaboutautism.com/the-up-side.html>
64. Vernon Smith on Asperger's syndrome - Marginal REVOLUTION, 7月 19, 2025にアクセス、
https://marginalrevolution.com/marginalrevolution/2007/04/vernon_smith_on.html
65. Vernon L. Smith - Wikipedia, 7月 19, 2025にアクセス、
https://en.wikipedia.org/wiki/Vernon_L._Smith
66. 発達障害の有名人・芸能人・スポーツ選手【歴史上の人物も紹介】|ブレインクリニック, 7月 19, 2025にアクセス、<https://tokyo-brain.clinic/psychiatric-illness/dd/1689>
67. 発達障害を公表した芸能人・有名人一覧(アスペルガー症候群・自閉スペクトラム・ADHDなど), 7月 19, 2025にアクセス、<https://kashiwa-ekimae.com/379>
68. 「ニューロダイバーシティ」により個々人の持つ可能性に気づき、強みを活かす方法とは, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.corner-inc.co.jp/media/c0186/>
69. 発達障害が有名人に多い理由とは？傾向や適切な接し方も解説, 7月 19, 2025にアクセス、<https://sanyokai-clinic.com/kokoro/5842/>
70. 発達障害 著名人や有名人や芸能人 | 日本人から世界を見てみるとこんな人もそうだったのか, 7月 19, 2025にアクセス、https://dd-career.com/blog/kashiwa_20241024/
71. 多様性尊重社会のキーワード「ニューロダイバーシティ」～ヒトそれぞれの違いにどう向き合うか, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.j-cho.jp/seminar/report/2023/0628.html>
72. ニューロダイバーシティ - Wikipedia, 7月 19, 2025にアクセス、

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%AD%E3%83%80%E3%82%A4%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%86%E3%82%A3>

73. 発達障害とニューロダイバーシティの関係とは？社会的適応のポイントを解説 - あしたメディア, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://ashita.biglobe.co.jp/entry/news/neurodiversity-dd>
74. 第5章 インクルーシブ教育への道: モデルとなる好事例, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/education_for_all/chapter5.html
75. インクルーシブ教育とは？共生社会の実現にむけた、多様性を尊重する新しい学びのカタチ, 7月 19, 2025にアクセス、
https://www.plan-international.jp/social_issues/inclusive_education/
76. ニューロダイバーシティ-発達特性のある人たちが輝く世界- | 長谷川 剛 - note, 7月 19, 2025にアクセス、https://note.com/hasegawa_takeshi/n/n19b880b730a6
77. ニューロダイバーシティとは？多様な人材が注目される背景と特徴、企業事例を紹介 - パソナ, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.pasona.co.jp/clients/service/column/cs/neurodiversity/>
78. ニューロダイバーシティは障害者雇用にどのような影響を及ぼす？ - YouTube, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.youtube.com/watch?v=kLe3XsrMDIA>
79. 6 Strategies to Support Neurodiversity in the Workplace - Lyra Health, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.lyrahealth.com/blog/neurodiversity-in-the-workplace/>
80. Resources For Employers - Neurodiversity Hub, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.neurodiversityhub.org/resources-for-employers>
81. Neurodiversity In the Workplace: What HR Leaders Need to Know - Betterworks, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.betterworks.com/magazine/how-to-embrace-neurodiversity-in-the-workplace/>
82. 7 Tips for Supporting Neurodiversity in the Workplace - GoCo, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.goco.io/blog/top-tips-for-supporting-neurodiversity-in-the-workplace>
83. Neurodiversity in the Workplace - AskEARN, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://askearn.org/page/neurodiversity-in-the-workplace>
84. 提言「発達障害への多領域・多職種連携による支援と成育医療の推進」ポイント - 日本学術会議, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-24-t292-7-abstract.html>
85. 2025年6月17日「発達障害者の支援を考える議員連盟 総会」| 特定非営利活動法人輝HIKARI, 7月 19, 2025にアクセス、
<https://support-hikari.net/%E3%80%90%E9%96%8B%E5%82%AC%E5%A0%B1%E5%91%8A%E3%80%91%E7%99%BA%E9%81%94%E9%9A%9C%E5%AE%B3%E8%80%85%E6%94%AF%E6%8F%B4%E6%B3%95%E3%81%AE%E6%9C%AA%E6%9D%A5%E3%82%92%E8%AA%9E%E3%82%8B-2025/>
86. (支援法成立20年)発達障がい者の輝く社会へ | ニュース - 公明党, 7月 19, 2025にアクセス、<https://www.komei.or.jp/komeinews/p387895/>
87. 習志野市こども発達支援施策ロジック・モデルの活用について提言書, 7月 19, 2025に

アクセス、<https://www.city.narashino.lg.jp/material/files/group/14/teigennsyo.pdf>

88. 発達障害の人はどれくらいいる？、7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.colorful-kids.jp/post/%E7%99%BA%E9%81%94%E9%9A%9C%E5%A%E%B3%E3%81%AE%E4%BA%BA%E3%81%AF%E3%81%A9%E3%82%8C%E3%81%8F%E3%82%89%E3%81%84%E3%81%84%E3%82%8B%E3%BC%9F>
89. 知的・発達障害研究部 - 国立精神・神経医療研究センター、7月 19, 2025にアクセス、
<https://www.ncnp.go.jp/nimh/chiteki/>